

2026 IOM 選手権 レポート

— たった 0.5 秒で 0.5 すべてが、この 0.5 ポイントに。—

2026 年 10 月 3 日・4 日。
静岡県磐田市・竜洋。

全国から IOM の精鋭たちが集まり、2 日間・全 13 レースにわたる熱い戦いが始まりました。

竜洋は、とにかく風がいい。

だからこそ、この場所では「たまたま速かった」ということが、なかなか通用しません。

艇のスピード、スタート、コース取り、マーク回航、風を読む力、そして一瞬一瞬の判断。

積み重ねてきた技術と経験が、そのまま結果に表れる。

ビギナーズラックの入り込む余地がほとんどない、本当のヨットレースができる場所。

そんな素晴らしい舞台で、今年も日本一を決める戦いが始まりました。

追う立場から、追われる立場へ

僕にとって、今年の選手権には特別な意味がありました。

2025 年、この大会で優勝。

だから今年は、追いかける側ではありません。

「連覇」という目標を背負い、追われる立場で迎える選手権。

もちろん、もう一度勝ちたい。

でも、大会前の僕は決して自信満々だったわけではありません。

むしろ、

「今年は相当厳しい。」

そう感じていました。

その大きな理由の一つが、僕が兄貴分として慕っているセールナンバー39・八木選手でした。

八木さんは、この選手権のために 3D プリンターを使った新艇を投入。

何度も、何度もテストを重ねてきました。

その準備を近くで見たり、話を聞いたりしていたからこそ、その本気度が分かっていた。

「八木さん、本気で獲りに来ている。」

そして大会前のスピードテスト。

正直、不安になりました。

とにかく速かった。

前年チャンピオンの僕が「これは厳しいぞ」と思うほどの速さでした。

さらに、最新鋭の VISS を持ち込んだセールナンバー50・永井選手。

池松選手、吉田選手をはじめ、全国から集まったトップセーラーたち。

誰が勝ってもおかしくない。

簡単に連覇などさせてもらえるはずがない。

そんな緊張感の中で、2026 年の選手権を迎えました。

金曜日。僕の選手権は、すでに始まっていた

僕は大会前日の金曜日から竜洋入りしました。

計測を受け、練習を行い、最後の調整をするためです。

昨年優勝したことに少し調子に乗って(笑)、今年は艇を**金メダル**を意識したゴールドカラーにしました。

ところが、その影響もあり重量の再調整が必要になりました。

一度バラストを抜いた状態も含めて重量を確認し、鉛で微調整。

最終的には、

総重量 4002g

また、事前練習では少しスターンヘビーに感じていたため、ウェイトを少し前方へ寄せました。

そして今回、A リグのセールもフルリニューアルしました。

前年より少し厚みのある生地を選択。

ただ、この新しい A リグをシェイクダウンできたのは、**大会前週の一度**だけでした。

基本的にはビルダー推奨のセッティング。

しかし、自分の目にはどうしても理想的なカーブに見えない。

十分に煮詰めきれないまま、本番を迎えることになりました。

前年王者として連覇を狙う大会なのに、

「これで完璧だ」

とは言い切れない。

正直、不安はありました。

だからこそ、自分の中で一つ決めました。

艇のスピードだけで勝とうとしない。

足りないものがあるなら、風を読む。

相手を見る。

無理をしない。

そして、ストラテジーで補う。

「速さだけではなく、レースを組み立てて勝つ。」

それが今回の僕の戦い方になりました。

開会式 そして、盟友への心配

いよいよ開会式。

しかし、そこで一つ心配なことがありました。

盟友でもある A 氏の体調が、あまり良くなかったのです。

第 1 レースには出場したものの、その後は棄権することになりました。

公式リザルトにも、第 1 レース出場後、以降のレースを走ることができなかったことが残っています。

一緒に戦ってきた仲間です。

当然、心配でした。

最後まで一緒に走りたかった。

でも、ここは選手権。

スタートラインに立った以上、自分のレースに集中しなければならない。

心配する気持ちはありながらも、そこは冷静に切り替えることができたと思います。

「絶対にフリートを落とさない」

第1レース。

僕が考えていたことは、

「まず1位を獲得」ことではありませんでした。

今回の選手権で、自分の中に絶対条件がありました。

それは、

「フリートを絶対に落とさない。」

ということです。

これは、昨年優勝したときも同じでした。

選手権は、一発の速さだけでは勝てない。

一つのレースで1位を獲得すること以上に、大きな失点をしないこと。

無理に勝ちにいくより、確実に次のフリートへ残ること。

優勝するためには、優勝争いから一度も脱落しない。

だから第1レースも、

「変なことをするな。」

「1 位じゃなくていい。」

「まず 3 位以内に入れ。」

そう自分に言い聞かせました。

そして、

3 位。

狙った通りのスタートでした。 2026IOM

初日のテーマは「残り続ける」

初日の風は 4 ノットから 8 ノット。

比較的安定した、言い訳のできないコンディションでした。

僕が意識したのは、

フリートを落とさない。

そして、5 位以内でまとめる。

焦らない。

無理をしない。

一発を狙わない。

優勝争いから絶対に消えない。

結果は、

3 位、4 位、4 位、1 位、4 位、5 位。

すべて 5 位以内。

第 4 レースでは、しっかり 1 位を獲ることもできました。 2026IOM

総合 4 位で初日を終了。

トップではありません。

でも、自分の中では、

「まずまず、計画通り。」

まだ慌てる必要はない。

まだ勝負できる。

優勝を狙える位置に残ったまま、2 日目を迎えました。

2 日目。本当の勝負

2 日目。

前日とはまったく違う竜洋が待っていました。

風は終始 10 ノットから 20 ノット。

B リグでの展開。

そして、その日の最初となる第 7 レース。

1 位。

最高の形で 2 日目をスタートすることができました。 2026IOM

この瞬間から、僕の中で、

「連覇」

という二文字が、少しずつ現実のものとして見え始めました。

でも、当然ながらトップグループは誰も簡単には崩れません。

トップ 5 は順位を入れ替えながらも、ほとんど差がつかない。

誰かが抜け出しそうで抜け出さない。

誰かが崩れそうで崩れない。

一つのミスで、すべてが変わる。

そんな紙一重の戦いが続きました。

「この風には、セオリーがある」

そんな中、レースを重ねるにつれて、一つの感覚が出てきました。

「この風には、何かセオリーがあるんじゃないか。」

必ずしもピンエンドから出ることが正解ではない。

風には周期がある。

その周期を考えながら、どこからスタートして、どちらへ展開するのか。

レースを重ねるたびに、ストラテジーを少しずつ調整していきました。

大会前に考えていた、

「艇のスピードで足りない部分は、ストラテジーでカバーする。」

それが少しずつ形になっていきました。

そして同時に、得点表を見る回数も増えていきました。

16 レースまで行けば 3 カット。

しかし、この状況ではそこまでレース数が伸びない可能性もある。

ならば、

「あとでカットすればいい」

とは考えない。

ここからは、ほぼスクラッチ勝負。

一つでも前へ。

1ポイントでも少なく。

ライバルたちの得点を確認しながら、戦い方を組み立てていきました。

兄貴分・八木さんの離脱

そんな中、残念なことが起こりました。

兄貴分の八木選手が、メカトラブルに見舞われました。

序盤は、

2位、2位、1位、2位。

事前のスピードテストで感じた通り、本当に速かった。2026IOM

しかし、その後のレースを棄権することになりました。

どれだけ準備してきたのかを知っています。

新艇を作り、何度もテストを繰り返していたことも知っています。

だからこそ、本当に残念でした。

勝負の世界です。

誰かが離脱すれば、自分の順位は上がるかもしれない。

でも、

仲間のトラブルを喜べるわけがありません。

最後まで一緒に戦いたかった。

それが本当の気持ちでした。

そして、崩れそうで崩れないスピードスター、ナンバー31・吉田選手も徐々に失速。

優勝争いは次第に、

ナンバー50・永井選手。

ナンバー64・池松選手。

そして僕。

この3艇を強く意識する展開になっていきました。

すべては、最終第 13 レースへ

そして迎えた、

最終第 13 レース。

スタート前。

1 位から 3 位までの得点差は、

わずか 1.5 ポイント。

13 レース戦ってきて、最後の最後まで誰が日本一になるのか分からない。

僕の中では、

「この最終レースで前に出た者が勝つ。」

そういう計算でした。

しかも、ここへ来て風が落ち始めます。

それまで B リグで戦ってきた中、A リグを選択する選手もいました。

A なのか。

B なのか。

最後の最後に、リグ選択まで勝負になる。

しかし、優勝を争うトップ 3 は B リグ。

当然、僕も B リグを選びました。

「レースに勝たなくていい」

最終レース。

僕は考え方を完全に切り替えました。

もう、このレースそのものに勝つ必要はない。

見るのは、

50 番。

64 番。

この二艇だけ。

A リグを選んだ艇が前へ行っても構わない。

何艇に抜かれようが関係ない。

僕がやることは、

この二艇を抑えること。

それだけでした。

スタート。

予想通り、Aリグの艇がどんどん前へ出ていきます。

でも、気にしない。

50 番。

64 番。

その二艇だけを見ていました。

そして最終レグまで、

僕はその前を走っていました。

最後のタッキングマッチ

あと少し。

このまま行けば――。

しかし、最後の最後。

ナンバー50・永井選手とのタッキングマッチ。

そこで僕は負けました。

永井選手が一つ前へ。

そのままフィニッシュ。

永井選手 6 位。

僕は7位。2026IOM

その瞬間、

僕の中では終わりました。

「負けた。」

そう思いました。

連覇できなかった。

13レース戦って、

最後の最後で届かなかった。

悔しかった。

でも、永井選手が強かった。

これがヨットレースだ。

そう思いました。

「筒井さん、勝ってますよ」

レースが終わり、表彰式が近づいた頃でした。

そこで初めて、思いもよらない言葉を聞きました。

「筒井さん、勝ってますよ。」

「え？」

最初は意味が分かりませんでした。

だって、最後のレースでは永井選手に前を走られた。

自分では完全に負けたと思っていました。

もう一度、得点表を見る。

筒井 31 ポイント。

永井選手 31.5 ポイント。

その差——**0.5 ポイント。**

公式最終結果にも、1 位・筒井 31 点、2 位・永井選手 31.5 点、3 位・池松選手 34 点と記録されています。 2026IOM

僕が勝っていた。

2026 年 IOM 選手権、優勝。

そして、

2 連覇。

僕が勘違いしていたこと

そこで初めて、自分の勘違いに気づきました。

僕は最終レースを、

カットレースとして抑えることができていた。

僕の最終レースの 7 点はカット。

一方で、最後まで永井選手を抑え続けたことで、

永井選手には、6 点をつけることができた。

最後のタッキングマッチでは抜かれました。

だから僕は「負けた」と思った。

でも実際には、そこまで永井選手を抑え続け、最終レースを 6 点にしたことが、

31 対 31.5。

わずか 0.5 ポイント差の優勝スコアにつながっていました。2026IOM

自分では「負けた」と思ったレース。

そのレースが実は、

僕を優勝させた最後の 1 レースだった。

一度もフリートを落とさなかった

大会がすべて終わって振り返ってみると、僕にとって、とても大切なことがありました。

今回、一度もフリートを落とさなかったのは、優勝した僕だけでした。

昨年、2025 年に優勝したときも、一度もフリートを落とさなかった。そして今年も、一度も落とさなかった。

これは、僕が選手権を戦う上で一番大切にしていることです。

1 位を何回獲ったかだけではない。勝てないレースで、どう残るのか。

苦しいときに、どこまで失点を抑えられるのか。

勝てるレースを勝つこと。

そして、負けてはいけないところで負けないこと。

最後に

素晴らしい会場。

素晴らしい風。

そして、最後まで本気で戦ってくれた素晴らしい仲間たち。

全国から集まった選手の皆さん。

そして何より、この素晴らしい選手権を支えてくださった運営スタッフの皆さん。

そのすべてが重なって、

2026 年 IOM 選手権、2 連覇

という結果を残すことができました。

勝ったことは、もちろん嬉しい。

でも、それ以上に嬉しいのは、

これだけ本気になれる仲間たちと、これだけ本気のヨットレースができたこと。

最後の最後まで、誰が勝つのか分からない。

13 レースを戦い抜いて、その差はわずか 0.5 ポイント。

こんなレースができたことを、僕は本当に幸せに思います。

皆さま、二日間、本当にありがとうございました。

そして来年もまた、この場所で。

元気に。

楽しく。

そして――

今年以上に、バチバチのレースをしましょう。

また最高の仲間たちと、最高の風の中で戦えることを楽しみにしています。

2026 年 IOM 選手権。

0.5 ポイント差での優勝。

そして、2 連覇。

この 0.5 ポイントを、僕はきっと一生忘れません。

